

Christine Mohrmann,

‘Saint Augustin écrivain’, *Revue des Études Augustiniennes*, 50 (2004) 123-146.

上村直樹

*Recherches Augustiniennes* 1 (1958) 43-66 に初出、*Études sur le latin des chrétiens*, t. II (Roma 1961) 247-275 に所収の論文の再録である。アウグスティヌスにとって、言葉が人間同士の意思の疎通を図るための道具であるにとどまらず、霊的な生の営為において不可欠な要素であるという観点から、その霊性の成熟と軌を一にする言語表現の諸相を取り扱う。キケロを中心とする古典文学の影響が初期著作において見いだされる一方で、キリスト教的な慣用語法への習熟のプロセスが認められる。その関心を«eloquentia»に注ぐことによって、他のキリスト教作家から際立つアウグスティヌスは、レトリックの範型としての聖書を重視する。このような考えについて、直接の影響関係がないにせよ、Pseudo-Longin, *Du Sublime* との類比が検討される。さらに、その作家としての実践を、いくつかの著作、説教、書簡から明らかにする。『神の国』の序文分析につづいて、その並列法と対照法の実践を示すとともに、『告白録』におけるイマージュの豊かさ、内的な生と神秘的な経験を語るための新たなスタイルについて言及する。そして、言語のスタイルを彫琢することが同時に、説教や祈り、キリスト教の教義の形成に本質的な役割を果たしていたと示唆される。